

仏教における倫理の構造

新 井 俊 一

1. 序論

拙論においては、21 世紀を間近に控えて、複雑な現代の諸問題に対してどのような倫理構造で仏教が応えるかを考える。ここで「倫理構造」としているのは、仏教には、他の宗教や文化と共通の倫理規範、仏教独自の倫理規範、そして他の宗教の倫理規範を包含する超宗教・超倫理的な倫理規範が含まれていると考えるからである。

現代のように多宗教・多文化が共存する時代で大切なことは、それぞれの宗教が自己の倫理規範を大切にしながら、他の宗教や文化の倫理規範を認めあい、尊敬しあうことである。仏教は、対内的には世俗生活を律する倫理と出世間へ導く戒律を設けているが、それ以上に「空」の精神によってすべての宗教や思想を、積極的にそのまま認めるという奥深さを持っている。仏教者は、この精神によって自らの行動を考え実行することが、仏教の智慧と慈悲の精神と合致すると考える。拙論はこの方向で論を進めて行く。

2. 倫理と宗教

倫理とは、人が世間の中で他者と関わりながら生活するにあたって望ましいとされている行動規範である。言いかえると倫理は、社会の構成員として人がそれを守ることによって社会から尊敬を受け、社会の秩序と繁栄に貢献できると考えられている社会的合意事項を意味する。このように倫理はその性格上、法律のような拘束力はないが、人の行動を外から律する働きを持つ。

それに対して宗教は、世間を含みながらも世間を超えた形而上の世界を想定し、仏や神と呼ばれる超越者との関わりを通じて、現世もしくは死後に形而上世界に転入する事を目指す精神活動である。

倫理はまた、一定の時期に一定の社会の全体的合意事項として現れるもので、

時と場所によって変化する。しかし宗教は、それぞれの「真理性の主張」を中核として成り立っており、その「真理性」は時代と場所の相違に関わらず絶対不変とされ、相対化を拒む。

しかし宗教と倫理とは多くの接点を持っている。宗教的に正しいとされている生活様式は、その宗教の影響下にある共同体の中での倫理的行為として機能する。旧約聖書における「モーゼの十戒」やコラーンに細かく規定された生活規範、そして仏教における「八正道」ならびに「五戒」や「十善戒」などがこれにあたる。これらを「宗教的倫理」と呼ぶことにする。

問題は、宗教的倫理と世俗的倫理とが必ずしも一致しないことである。たとえば、妊娠中絶、避妊、輸血、脳死と臓器移植、遺伝子工学と遺伝子治療、などの「倫理性」には、さまざまな宗教の間で議論があることは周知の事実である。同じ宗教の中でも合意に達していないことが多い。

歴史上、さまざまな宗教が「愛」と「平和」と「欲望の抑制」を教えているにもかかわらず、現実には宗教の相違によって戦争が起こったり、異教徒に対して自己の価値観を強制したりすることがあった。民族間の経済的・政治的対立が原因となって起こる世俗的抗争の際にも、宗教本来の教えをさしおいて、抗争の一方を支持するに至ることもあった。これは宗教的正義を世俗的正義に引きずり下ろすことによって起きた自己矛盾である。すなわち、宗教はそれぞれ普遍的真理を説いているが、組織として世俗的対立関係に関わると、普遍性を失い、自己を局地化し相対化してしまうのである。平和の主張が抗争の原因となり、啓蒙の目的を持つものが迷妄に陥ることになる。

この事態を避けるためには、それぞれの宗教が、この宗教的多元世界を認めて、進んで自己を相対化することを学ぶことである。自己を相対化するとは、他の宗教の存在、他の価値観の存在を認めて、自己を多宗教・多文化世界の一員と見なすことである。そうすることによってはじめてそれぞれの宗教は自己の「真理性の主張」の普遍性と絶対性を回復することができると考える。「空」を究極的真実とする仏教は、これを達成する可能性を内に含んでいる。

3. 文明の自己矛盾と現在の諸問題

歴史学の立場から言うと、文明とは都市を中心とした人間の営みである。人類は新石器時代に定住生活に入ってから、自然を自己の都合にあわせて変化させながら、自己の活動範囲を広げてきた。文明の歴史は、森林破壊・自然破壊の歴史

と言っても過言ではない。かつて大森林に覆われていたメソポタミア平原、インダス・ガンジス平原、黄河平原はほぼ完全に開拓され耕地化されたが、同時に乾燥化が進み、洪水に悩まされることになった。すなわち文明はその興隆のはじめから、人間の生活圏を広げ、より都合のよい環境を作ろうとすればするほど、負の結果に悩まされるという自己矛盾を背負ってきた。一定地域内の生産性が極限に達し、その人口を支えきれなくなったとき、文明は滅亡に向かうか、もしくは自己補強のための征服戦争に訴えざるを得なくなる。文明は自らの滅亡の原因をその中に含んでいるのである。

18世紀末にイギリスに起こった産業革命の後、高度資本主義と強い国家意識の興隆と相まって自然破壊は急速に進んだ。それと同時に、西欧の先進工業国家が他の伝統文明諸国を支配下におき、強引にその国の政治・経済体制を支配することが行われた。20世紀に入ると、遅れて近代化した国々も自主独立のために工業化を図り、後進の国々を政治的経済的に従属させるという構図が起こった。

20世紀の特徴は一口で言うと、理性と自我の肯定であった。これはまた、「幸福の追求」の名の下に行われた際限のない欲望の追求であった。それによる顕著な現象は、科学技術の急速な発展である。これは今も続いていて、多くの科学者や政治家ならびに一般市民が、宇宙開発や遺伝子工学や臓器移植などの先端科学技術に夢を託している。文明の際限のない自己増殖と、自然の摂理への挑戦は、極大と極小の分野でますます大規模に続いている。

科学技術の止めどもない発展の結果は、一般的生活環境の劣化、オゾン層の破壊、空気中の二酸化炭素の増加と地球温暖化の危惧の増大、加速度的に起こっている種の絶滅、世界的に進行する森林の消滅と砂漠化現象、等々の自然破壊現象として現れてきた。さらに核兵器に代表される先端技術兵器の拡散と地域紛争の激化、エイズやエボラ出血熱などの疫病の頻発、世界人口の爆発的増加と食糧問題の深刻化、国家間の貧富の差の拡大と、諸国の国内における貧富の差の拡大、旧ユーゴスラビアやアフリカ諸国における内戦の頻発、いわゆる「民族浄化」に代表される民族間の抗争の激化、等々も、20世紀における理性と自我の追求が引き起こした極めて非理性的な結果である。

まとめると、このように理性と自我の無制限の追求によって、人類は全体として、近代以前よりも不幸になったように思われる。人類は文明化すればするほど、自然から遠ざかり、本来の人間性を失ってきた。さらに人間活動によって、人類はもとより、地球上の生物は破滅の危機に直面している。21世紀は20世紀の行

き過ぎた理性と自我の肯定を反省し、是正する時である。この時に仏教がどのような貢献ができるか、それが拙論の最大の関心である。

4. 現代に求められる倫理構造

上に現代の諸問題を述べたが、それに基づいて、次に21世紀に向けて望ましい倫理の構造を考えてみる。

1) 対人的・対集团的倫理——これは「道德」と同義語で使われている倫理であり、現世で生きるための知恵の集成である。『論語』にある「己の欲せざる所は、人に施す勿れ」で代表される孔子の言葉や、キリスト教で「黄金律」とよばれる「他人から自分ににして欲しいことを、人々にしてあげなさい」、仏教における「不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒」の五戒や「不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不悪口、不両舌、不綺語、無貪、無瞋、正見」の十善戒は、そのまま道德律として考えることができる。

2) 人類以外の生物をも含めた「いのち」に対する倫理——科学技術の発展の結果、人類が地球上で最強の種となり、ライオンや虎のような強力な動物でさえ、人類の都合と憐憫によって細々と生き残っている状態である。昨今、野生動物との共生や、種の絶滅の防止が唱えられているが、人類が支配者として他の生物の生存を許すと言うのでは本当の共生にならない。同じ地球上に生を受けたものとして、人類は自らの姿勢を低くし、他の生物と同じ目の高さで共存共栄を図る必要がある。

3) 地球に対する倫理——昨今「地球に優しい」「環境に優しい」「地球を救おう」といった表現が使われるが、これは傲慢な言葉である。地球も環境も、人類を育んだ親であり、地球を痛めつけてきたのは人類である。地球はそれ自身のいのちを生きており、いつかは火星のように死の世界になるだろうが、人類がその死を早めるのは親殺しに等しい。人類はいのちを育ててくれた地球に対して、親や同胞に対するのと同じように「黄金律」を自己に科す必要がある。地球が感情を持つとすればどのように感じるかを常に考えることが大切である。それがまた人類の存続と繁栄につながっていく。

4) 宇宙に対する倫理——人類の視野は今や宇宙の果てまで届こうとしている。しかし、月や他の惑星を人類の利益のために使うつもりで「宇宙開発」をすると、それは地球で起こった自然破壊を宇宙に持ち出すことになる。宇宙探査はあくまでも、自らのいのちの尊さを知るためでなければならない。宇宙は地球の延長で

あるが故に、上に述べた地球に対する倫理がそのまま当てはまる。

5) 時間に対する倫理——人間は現在に生きると同時に、過去・未来とも密接な関連をもって生きる存在である。その意味では、過去も未来も現在の中に共時的に存在する。そうすると、過去から続いてきたいのちも未来に続くいのちも、あたかも自分のいのちを扱うように大切にしなければならない。これは歴史に生きる人類の、過去・現在・未来に対する義務である。

以上の論議をまとめると、21世紀の倫理には、次のことが求められる。

- 1) 人間の都合による善悪判断を相対的なものと見なす。
- 2) いのちを倫理判断の中心におく。
- 3) 宇宙的視野で考える。
- 4) 過去・現在・未来を網羅する、時間を超越した視野で考える。
- 5) 究極的には倫理は、智慧と慈悲に基づく、普遍性を持った「自愛」と「人間愛」を基本精神としていなければならない。

5. 仏教者として依って立つ倫理

仏教は人間を世界の支配者と考えずに、他の動植物と等しく、与えられたいのちを生きる「衆生」の一員と考えている。浄土教はこれをさらに徹底して、人間も他の動植物も、すべて六道を輪廻する迷いの生を生きる存在であるが故に、すべて阿弥陀如来の慈悲のはたらきの対象だと教えている。

仏教の根本は「三法印」すなわち「諸行無常、諸法無我、涅槃寂静」で表される。これはすべてのいのちが積極的に生きて、そのまま光り輝く状態を表している。大乘仏教はさらに徹底して、仏教の究極的真実を「空」の一語におさめている。「空」とは、ゼロであって、極小であると同時に無限大でもある。すべての世間的価値がゼロになると同時に、すべての存在がそのまま最大限に受け入れられる状態である。そして「空」には、上に挙げた21世紀の倫理の条件がすべて含まれている。

大乘仏教では、仏・菩薩と衆生の間には次の関係がある。

1) 仏教本来の教えから言うと、この世のすべての事象は無常であり、すべての存在は無我である。したがって、衆生の苦しみも生の一様相にすぎないのであり、仏・菩薩が救おうとしても、救う相手がいない。救う方も救われる方も無我であるから、仏・菩薩は何もしなくてもいいということになる。これは世俗の善悪を超越した観点であるから、倫理道徳は論外となるが、上記の「普遍性を持った自

愛と人間愛」の根本的支柱となる。

2) しかし、現実には衆生は、現象世界に常住を見ようとし、自己の中に不変の我を見ようとする。これは無明から起こる我執であるが、我執によって起こる苦悩も厳然たる事実である。ここにおいて仏・菩薩による救済の必要が起こってくる。釈尊がこの世に現れて、衆生が仏になる道を説いてくださったのは、この段階における衆生の救済の必要を認められたからである。釈尊は、衆生が真実の世界に入るためのさまざまな道を示された。その典型が「諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教」で表されている『七仏通誡偈』である。ここでは何が悪か、何が善かは明らかにされていないが、それは前に挙げた五戒や十善戒、「正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定」の「八正道」で表されていると見てよいであろう。自他のいのちを損ない痛める行為が悪であり、自他のいのちを輝かせる行為が善である。言いかえると、煩悩の働きによって行う行為はすべて悪であり、煩悩を押さえる方向で行う行為は善である。このように、仏教徒にとっては、仏道修行そのものが生活の倫理となる。

3) 問題は、これらの生活倫理の実践には、身口意の三業の一致が要求されるのであり、通常の社会生活を送るもの（凡夫）が善を行うことは、きわめて困難である。特に釈尊の時代から遠く離れ、釈尊の英知を本当に引き継ぐ人がなくなった末法の時代では、煩悩への対処が不可能になってくる。痛みを持ってこの自覚を持った人は、善導、源信、法然、親鸞に代表される浄土教の祖師たちである。伝統仏教の教えを頭ではわかっていてもそれを行じることのできない悲しみは、ついに絶対他力の救いに目覚めることになった。

浄土教においては自我の否定は、親鸞の言葉を借りると、「煩悩具足の凡夫」「小慈小悲もなき身」「地獄は一定すみかぞかし」の自覚によってなされる。すなわち、我執に苦しむ自己に目覚めることが、自我を否定することと同等になる。このときが、自己の煩悩の深さと如来の恩徳の厚さに目覚めるときである。自己の根元的悪に目覚めるとき、次第に悪が行えなくなる。このように、浄土教では、倫理は、外から自己を縛るものとしてではなく、聞法の結果として内面から起こってくる。これを親鸞は次のように言っている。

としごろ念仏して往生ねがふるしには、もとあしかりしわがこころをもおもひかへして、とも同朋にもねんごろにこころのおはしましあはばこそ、世をいとふるしにてもさふらはめとこそおぼえさふらへ。よくよく御こころえさふらふべし。

(『末燈鈔』第十九通)

自我否定が徹底したとき、もはや他人の行為を善だ悪だと言えなくなる。善行をしている人に対しては最大の敬意を捧げ、悪を犯している人には、その痛みを共有することになる。このように浄土教では、限らない自我の否定によって、いのちへの敬意が培われ、阿弥陀如来の慈悲と智慧のはたらきが宇宙的規模で感じられ、過去現在未来のいのちに対して最大の敬意が払われることになる。何の行も戒も実践できない自己に目覚めたときに、結果的には仏教本来の自律的な倫理を実践することになるのである。

6. 結論

上に仏教者として依って立つべき倫理構造を述べたが、大切なことは、第一に、仏教各宗派が自己活性化をはかって、仏教の基本的な倫理観を人々に伝えることである。第二に、上に挙げた 21 世紀の倫理の条件に基づいて、仏教が率先して、すべての宗教に共通の基本的倫理を確立し、宗教間の相互協力を働きかけることである。第三に宗教的多元社会においては、それぞれの宗教が自分の倫理規範を自己の影響下の人々に行き渡らせ、他の宗教に対しては、互いに伝統を認めあうという精神を行き渡らせることである。このように、仏教ばかりでなく、すべての宗教が普遍性を持って輝くということが起こる。絶対普遍性を主張すれば相対局地性に陥り、相対に徹すれば絶対普遍性を再確立できる。「空」を究極的真実とする仏教には、このような超宗教的要素をその構造の中に含んでいる。

主な参考文献

『真宗聖教全書』II

石崎嘉彦・山内廣隆編『人間論の 21 世紀的課題』ナカニシヤ出版、京都、1997。

ピーター・シンガー著『実践の倫理』昭和堂、京都、1998（第 8 刷）。

中村 元『原始仏教の生活倫理』春秋社、東京、1995。

遊亀教授『親鸞と倫理』百華苑、京都、昭和 51 年（第 4 刷）。

David J. Kalupanahe. *Ethics in Early Buddhism*. Univeristy of Hawaii Press, Honolulu, 1995.

Hammalawa Saddhatissa. *Buddhist Ethics*. Wisdom Publication, Boston, 1997.

Shundo Tachibana. *Ethics of Buddhism*. Curzon Press, Great Britain, 1992.

〈キーワード〉 文明の自己矛盾、現代と倫理、いのち、「空」

（相愛女子短期大学教授）